

元警視庁捜査第一課刑事

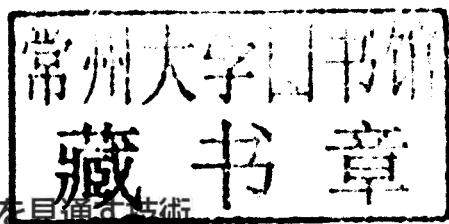
飯田裕久



「裏」を 見通す 技術

勝ちたい
あなたに捧げる
刑事の「秘」情報収集法

講談社+α新書
プラスアルファ



「裏」を見通す技術

勝ちたいあなたに捧げる刑事の「情報収集法」

飯田裕久

1963年、千葉県に生まれる。1982年、警視庁入庁。署轄の刑事を経て、1992年のトリカブト殺人事件をきっかけに警視庁捜査第一課に配属。その後、地下鉄サリン事件、音羽お受験殺人事件など100件以上の殺人事件に従事し、2007年、警部補で退職。退職後は、刑事・警察物の企画協力、原案提供、演技指導、警察操演をおこなう一方、装飾、小物制作、特殊メイクにも異才を発揮する。俳優としてもドラマ・映画などで活躍中。監修作品は「臨場」「ゴンゾウ」(テレビ朝日系列/東映)、「ロストクライム—閃光—」(角川映画)ほか、50本以上を数える。

著書には「警視庁捜査一課刑事」「地取り」「検挙票」(以上、朝日新聞出版)、『自分を鍛える働き方―「刑事五十訓」に学ぶ」(サンマーク出版)などがある。

講談社+α新書 524-1 C



「裏」を見通す技術

勝ちたいあなたに捧げる刑事の「@情報収集法」

飯田裕久 ©Hirohisa Iida 2010

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

2010年6月20日第1刷発行

- 発行者——— 鈴木 哲
発行所——— 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 出版部(03)5395-3532
販売部(03)5395-5817
業務部(03)5395-3615
帯写真——— 井上孝明
デザイン——— 鈴木成一デザイン室
カバー印刷——— 共同印刷株式会社
印刷——— 慶昌堂印刷株式会社
製本——— 牧製本印刷株式会社
本文データ制作——— 講談社プリプレス管理部

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料は小社負担にてお取り替えます。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは生活文化第三出版部あてにお願いいたします。

Printed in Japan ISBN978-4-06-272658-0 定価はカバーに表示してあります。

●目次

序章　まえがきに代えて　3

第一章　事件待機〈情報収集に臨む心構え〉

遺族から言われたきつい一言　14

自分のために働け　17

狭き門である刑事への道　19

宿酔の男が警視総監賞　22

お茶くみは人間観察の基本　24

飲み会は三時間までの弊害　28

「仕事」に休みはない　30

常にアンテナを張れば、天運をつかめる　32

立場で変わる「アンテナの張り方」　34

刑事にはギャンブルが必要　39

長モノ御法度、ビールは……　42

第二章 聞き込み、内偵（人から何を読み、何を得るか）

- 聞き込みのネックは「人の記憶」 48
- 「短期記憶」と「長期記憶」 50
- 記憶を呼び起こすには状況を再現 52
- 犯人は意外と指名手配を知らない 55
- 時にはよそ見も大切 58
- 携帯電話は心を和ませるアイテム 61
- 刑事の基本は質屋回り 63
- 新人には多少のズルも必要 65
- 被害者家族の心を開いた料理 68
- 「一点豪華主義」のススメ 72
- 難航した、密室事件の事情聴取 75
- まわり道が近道になる 78
- 身内にも漏らさない秘密 80
- 他人のテリトリーでは足早に去れ 84
- 電話捜査は絶対にNG 86
- 顔を見なければ熱意は伝わらない 88
- 黙り込んだ目撃者 90
- 心を開かせるのは肩書ではない 92

第三章 ブツ捜査〈眼前のブツをいかにホシにつなげるか〉

捜査もビジネスも「ナシ割」から 96

見る人によつては情報がある 106

画像一枚から感じたひらめき 99

雑学や商品知識は身を助ける 108

動かなければ何も始まらない 102

目先を追い求めて本質を見失うな

白骨死体は事件性ありか？ 104

原点に戻つて見直しする 114

111

第四章 取り調べ〈相手との勝負、命運を分けるのは……〉

看守は人の心を学ぶ第一歩 120

自供前に被疑者が取る行動 134

真面目なだけでは本質を見抜けない 123

兆候を把握して勝機を得る 137

「三味線」という泣きのテクニク 127

ホシは夜光る 138

「泣き」はタイミングを逃すな 131

第五章 裏付け〈勝った時こそ勝因を検討せよ〉

勝因の分析こそが成長の鍵 144

リズムに乗った裏付けが肝要 146

情報は選別せずに集め切れ 149

ダブルチェックしても信じるな 152

「まさかの坂」でつまずくな 155

危機管理システムは徹底的に整えよ 158

何のための成功かを見極める 160

アナログな手法の重要性 162

第六章 事件後のケア〈アフターケアは信用を得るためと次回への橋渡し〉

警部補を恨むグレーゾーンの男 168

別れ際まで誠意を尽くせ 170

何のために働くのか 172

「檀家」こそが情報収集の命綱 175

「二期一会」だけでは終わらせない 178

犯罪者の家族に対する複雑な想い 179

相手に対して最後まで責任を取る 182

あとがき

185

「裏」を見通す技術

勝ちたいあなたに捧げる刑事の「秘」情報収集法

序章へまえがきに代えて

混迷の時代である。

大手と言われてきた企業が倒産や吸収合併を繰り返し、なんとか不況を凌いでいるかのよう^しに見えている企業でも、人員削減を余儀なくされている。

突然のリストラはどんな優秀な社員でも他人事^{ひとごと}ではなくなり、今は毎日出勤できている人でさえ、明日の我が身がどうなるかはわからないのが現状だ。

完全失業率は5%に達し（二〇一〇年三月現在）、同時に有効求人倍率も低迷、今後日本がどうなってしまうのか、まったく予想すらつかない時代になってしまった。

だが、このような状況が未来永劫^{えいごう}続くことはないだろう。過去にも同じような危機が何度も訪れ、そして人々はそれを乗り越えてきたからである。

といつても、決して安心してはならない。

忘れてならないのは、不況時にすべての企業や人々が生き残ったのではなく、一定の条件

を満たした者たちだけが勝ち残り、今に「生」をつないでいるということだ。

一定の条件とはいったい何であらうか。

一言で言えば、「あらゆることに関する情報を収集し、それを分析したうえで、表面に見えているものから裏側に隠された真実や状況を見極め、さまざまな対応を柔軟に取つてきた」者だけが勝ち残ってきたのである。

実例を挙げてみれば、「一〇〇年に一度の不況」とまで言われる中で、京都の大型餃子店は、拡大した事業を見直し縮小して原点回帰をはかり、地域のニーズを調べたうえで、各店舗の店長に営業方法を一任し、リーマン・ショック以降から飛躍的に業績を伸ばした。

また、リーズナブルな価格で名を馳^はせた有名大型衣料販売店も、全国の店長を定期的に集め、そのうえで客の嗜好について徹底的に情報収集し、売れ残らない商品を作ること、二〇〇九年秋発表の営業利益は前期比約二五%増で過去最高益を得た。

業種こそ違えど、この不況下でも勝ち残った大きな要因は、どこか共通しているのではないだろうか。

つまり、双方の会社とも「地域や世間が欲している感覚や考え方について極めて正確に情報収集し、それを自社のものと照らし合わせて見直し、その結果を世の中に還元」したから

だと考えられる。

すなわち、「情報収集」し、そして「裏を見通し」て、消費者の真のニーズを掌握するところこそ、勝利するために一番大切なものなのである。

一方、商売とはまったく別世界ではあるが、同じように昨今の景気の低迷に反し、年ごとに上向きな数字をはじき出しているものがある。

それは、かつて私が所属していた警察の、全国の刑法犯検挙率や凶悪犯罪などの事件の検挙率である。

具体的に言えば、全国の刑法犯検挙率は、一〇年前には一九・八％に落ち込んでいたが、現在は三一・五％に向上し、さらに殺人や強盗、強姦や誘拐といった重要犯罪も、検挙率は五〇％台前半から六二％にまで向上しているのだ。

それでは、警察はいかにして高い検挙率を誇っているのか。

決して科学捜査の技術やコンピューターが進化したからだけではない。そもそも犯罪というのは、人間が人間社会の中で行う行為である。事件解決に結びつく最大の糸口は人間の中に埋もれている。警察は人間そのものからあらゆる情報を収集し、極めて効率よく分析をして捜査の指針を立てているから犯人を捕まえられるのである。

すなわち、人間である刑事が捜査感覚を最大限に研ぎ澄ませて、人間からの情報収集に奔走するからこそ突破口を見出せるのだ。

ここで大事なものは、事件捜査をする警察も利益を追求するさまざまな企業も、人間から情報を収集して分析し、求めるものを得ていかなければならないという面では変わりがないということである。

情報は、何も人間と対話をすることだけで得られるものでもない。このご時世で勝ち残っている企業の社長も、迎えの車をあえて断り、汗だくになって通勤電車を乗り継ぎ、そこで人々の服や流行、たわいもない世間話や嗜好、考え方を直接体で読み取り、それを自社の仕事のやり方と対比して、舵取りをしているのである。企業も警察も、個々人が脳に汗をかけて技術を習熟しなければ得るものはないのだ。

残念ながら本書では、情報収集の特別なテクニックやそのものズバリの「裏」を見通す技術は一切書かれていない。

あくまでも、私がかつて警視庁捜査第一課の刑事だった頃の、あるいは駆け出しの署轄刑事だった頃の経験を踏まえ、自分の思いの丈を綴っただけである。

しかし、警察が犯人を逮捕する際の要である情報収集術、そして、物事の「裏」を見通す

技法には、あなたが気がつかなかったノウハウが隠されているかもしれない。

今回、刑事捜査ならではのものとして、事件発生から解決までになぞらえ、「事件待機」「聞き込み、内偵」「ブツ捜査」「取り調べ」「裏付け」「事件後のケア」というふうに、各章をそれぞれ一連の事件捜査に準じて構成してある。

少しでも刑事のセオリーを知りながら、デカ流の方法を役立てていただけると幸いである。

二〇一〇年六月二〇日

飯田裕久
いいた ひろひさ

●目次

序章　まえがきに代えて　3

第一章　事件待機〈情報収集に臨む心構え〉

遺族から言われたきつい一言　14

自分のために働け　17

狭き門である刑事への道　19

宿酔の男が警視総監賞　22

お茶くみは人間観察の基本　24

飲み会は三時間までの弊害　28

「仕事」に休みはない　30

常にアンテナを張れば、天運をつかめる　32

立場で変わる「アンテナの張り方」　34

刑事にはギャンブルが必要　39

長モノ御法度、ビールは……　42

第二章 聞き込み、内偵（人から何を読み、何を得るか）

- 聞き込みのネックは「人の記憶」 48
- 「短期記憶」と「長期記憶」 50
- 記憶を呼び起こすには状況を再現 52
- 犯人は意外と指名手配を知らない 55
- 時にはよそ見も大切 58
- 携帯電話は心を和ませるアイテム 61
- 刑事の基本は質屋回り 63
- 新人には多少のズルも必要 65
- 被害者家族の心を開いた料理 68
- 「一点豪華主義」のススメ 72
- 難航した、密室事件の事情聴取 75
- まわり道が近道になる 78
- 身内にも漏らさない秘密 80
- 他人のテリトリーでは足早に去れ 84
- 電話捜査は絶対にNG 86
- 顔を見なければ熱意は伝わらない 88
- 黙り込んだ目撃者 90
- 心を開かせるのは肩書ではない 92